

《ワーキンググループ報告》

2. FDG-PET検査の適正利用に関する検討

代 表：窪田和雄（国立国際医療センター 第三放射線科）

メンバー：奥 真也，小澤幸彦，織内 昇，近藤千里，
鈴木天之，寺澤晃彦，中川敬一，中本祐士，目黒謙一

FDG-PET検査の適正な利用を普及させるために、FDG-PETの保険適応の拡大と診療報酬の適正化が必要である。このために、本年は食道癌、卵巣癌、子宮癌、悪性リンパ腫の治療後について、既存のFDG-PET検査に関する論文の検索収集、エビデンスの整理、医療経済効果の予測を行った。

食道癌では、FDG-PETは術前病期診断において大きな役割を発揮する。リンパ節転移や遠隔転移を正しく診断することにより、治療法の変更の可能性があり医療経済効果も期待できる。

卵巣癌では、FDG-PETは再発診断に良好な診断成績が得られる。再発診断のためのセカンドルック手術をFDG-PETに置き換えることにより、予後に差が無く、非侵襲性および医療経済効果が期

待できる。

子宮頸癌では、FDG-PETはリンパ節転移診断に優れている。傍大動脈リンパ節転移を発見し、手術を放射線治療に変更することにより、医療経済効果が期待できる。

悪性リンパ腫治療後のFDG-PETは、治療後評価と残存腫瘍の評価の両者に対し、ホジキンリンパ腫、非ホジキンリンパ腫いずれにおいても中等度の診断精度を持つ。

これらをもとにして食道癌・婦人科癌については医療技術評価希望書が作成され、保険適応拡大のための申請書として日本核医学会から内保連委員会に提出された。